

今日の東京は、思いがけず「早春の雪」に見舞われました。朝から冷たい雨が降っていましたが、昼頃になるとそれが次第に雪へと変わり、街の空気が一気に冬へ引き戻されたように感じられました。地面に積もるほどではありませんでしたが、一時は遠くの木々が白く霞んで見えるほど、しっかりと雪が降っていました。

今日の雪は、とても大粒でした。ふわりふわりと舞い落ちるその様子は、まるで白い花びらが空から降ってくるようです。このような大きな雪は、都市部でよく見られる降り方で「牡丹雪（ぼたんゆき）」と呼ばれます。

牡丹雪は、気温が0℃前後で湿度が高いときに生まれます。雲の中でできた小さな雪の結晶が、落下する途中で互にくっつき合い、次々に合体して大きな雪片になります。気温が低すぎると結晶同士がくっつきにくいのですが、0℃近い空気では表面がわずかに湿り、結晶同士が接着するように集まりやすくなります。その結果、花のように大きくふわふわした雪片となって地上へ降ってくるのです。

私は降ってくる雪粒を黒い厚紙に受け止め、融けてしまう前に急いで撮影しました。黒い背景の上では、白い雪の結晶がくっきりと浮かび上がります。よく観察すると、一つ一つの粒は単独の結晶ではなく、「樹枝六花」と呼ばれる枝分かれた六角形の結晶が、何百粒（あるいは千粒以上）も集まってできていることがわかりました。まるで小さな結晶の花束のようです。

中には直径が3センチほどもある大きな雪片もありました。東京の雪はすぐに融けてしまうことが多いのですが、こうして間近で結晶を観察すると、短い冬の贈り物のようにも思えてきます。都会の中でも、少し注意して見てみると、雪の世界は驚くほど精巧で美しいものです。東京で雪の結晶を観察するのは、なかなか楽しいものです。

(2026年3月上旬／東京都文京区)

